

## 幼小連携のカリキュラムについての研究 —「道徳性」「協同性」の育成—

中島 朋紀（初等教育学科・講師）・東 ゆかり（初等教育学科・准教授）  
荒松 礼乃（初等教育学科・講師）・白川 佳子（初等教育学科・准教授）  
西島 大祐（初等教育学科・講師）・島崎真由美（鎌倉女子大学初等部・教諭）

### 1. 中間考察

本学においては建学の精神（教育理念「感謝と奉仕に生きる人づくり」）を基調とし、併設校の幼稚部（幼稚園）・初等部（小学校）・中等部（中学校）・高等部（高等学校）が一貫した教育理念を踏まえ、子ども「一人ひとりの成長過程に即した教育」が実践・展開されている。とりわけ、幼稚部と初等部における教育は子どもの生涯を通じた人間形成や学習活動の基盤となっていくものである。

環境を通じた指導を基礎とし、自発的な学習としての遊びを通して指導を行うということを基本とする幼稚園教育においては、幼児の自発的な環境との関わりが、遊びという形態によって、幼児の中に学習の土台・契機となり、その結果として「知的好奇心」や「探究心」に溢れる「関心・意欲・心情・態度」が養われるのである。幼稚園教育には、子どもの活動を中心においた教育課程の編成原理、方法・内容の構成がある。また、子どもの生活経験を中心として教育的意図を見出せる環境を、幼児の生活の中の活動において構成することで、子どもの学習が展開されるという生活経験の重視もある。

このような方法を指導原理とする幼稚園教育から、教科による指導を中心とする小学校教育への円滑な移行を考える場合に、その学習指導・方法の根底にある生活経験を主眼とする指導原理が小学校教育において、どのように教育課程に反映され、どのように生かされるものかが、両者の連携を考える場合に重要である。

中間報告では、幼小連携の教育課程における子どもの学習経験の意味と関係性を明らかにし、学力育成や学習指導の基盤としてのアプローチカリキュラムにおける幼稚園と小学校の連携の可能性を考察した。

### 2. 建学の精神に基づく教育課程

本学では、『『豊かなこころ』を育むふれあい学習と『確かな学力』を養う総合学習<sup>1)</sup>』（表1）として幼・小・中・高の15年間を見通した「学びの環境づくり」「学力育成」の連携を図っている。連携の前提としては、建学の精神に基づく教育課程を通して、「目の前の子どもが抱える問題の把握」、「学びの環境の見直し・工夫」、「幼と小、小と中、幼から高の学びをつなぐために何が必要かの協議」であった。どの校種であっても、目の前の子どもの課題は教師にとって言うまでもなく重要課題である。幼稚部の子どもだから、初等部の子どもだからではなく、社会や家族の在り方の変化をも含めた子どもの課題を共有していかなければならない。その上で、子どもが学ぶ環境をどのように、子どもとともにつくっていくかという課題が連携に位置づけられる。

初等部、あるいは中・高等部に入学してからの子どもの現状の課題の解決の糸口を探すため、そのために幼・小・中・高の15年間の子どもの学びの環境を子どもとともに整え、課題を見つけられるよう、子どもたちを支援していかなければならない。そのためには、学校種を超えて、そして領域や教科をも越えた学力の形成が求められる。そして、子どもたちにどのように学力を形成していく手立てを教師を含め、環境を整え、育ちを再構築していくことが重要である。

具体的なねらいの一つに「学力・学習力を育成する」ということが置かれている。ここでの「学力・学習力」は、「豊かな心を育む」、「確かな学力を身につける」、「ふれあい体験から学ぶ」ことから育成される能力である。これは、子どもたちが「人・もの・時」との関わりのなかで何に出会い、どのように経験を再構築していくかを「学力・学習力の基礎力」として見定め、「学力・学習力の土台となる力」は何かを捉えてその育成を目指すものである。

ここにおいて、幼小連携における「学力・学習力の土台となる力」について挙げられているのである。幼児期にどう「学力」を形成するかというより、子どもの発達に沿って、「学びの基礎力」や「育ちの基礎力」を充実させる実践が提示されているのである。

表1. 併設校（幼稚園・初等部・中・高等部）における「学びの環境」

|             | 幼稚園   | 初等部   | 中・高等部  |
|-------------|---|---|--|
| 豊かな心を育む     | ☆人格を磨く活動<br>①砂あそび<br>②あいさつ<br>③ともだち<br>④積み木<br>⑤かたづけ  | ☆自分を表現する遊び<br>①読書の時間<br>②芸術鑑賞<br>③音楽会<br>④7つのマナー<br>⑤清掃指導   | ☆こころを磨く機会<br>①作文・俳句指導<br>②芸術鑑賞<br>③合唱コンクール<br>④立居振舞講座<br>⑤ゴミ分別リサイクルを考える  |
|             | 家庭で育った子ども達にとって初めての社会である幼稚園は、生涯にわたる“豊かな心”の土台作りの時期である。信頼関係を結ぶことで、「先生が好き」になり、自己を発揮できる遊びに取り組むことから「自分が好き」になり、さらには「友だちが好き」になるように、時と所に応じた指導を行っている。 | 文化を楽しむことと、生活を楽しむことをバランスよく磨いていく。優れた書物や芸術に出会い、自らも体験することは真に美しいものを感じる力になる。「7つのマナー」と清掃指導は、本校伝統のものであり、美しい生き方のベースとなる要素である。 | 日本語の美しさを知ること、それに親しむこと。日本の伝統芸術や作法にふれることで心の機微を知り、情緒ともてなしの心を育むこと。これらは、自然環境を大切にすること意識とあいまって、すべてに対してやさしく接する女性の土台となっていく。 |
| 確かな学力を身につける | ☆学力の土台を育てる遊び<br>①ままごと（探究心）<br>②積み木（達成感）<br>③ざりがに（好奇心）<br>④絵本（集中力）<br>⑤絵の具（表現力）  | ☆基礎を固める時間<br>①教科指導の充実（T・T）<br>②各種講習<br>③英語学習<br>④オリジナルプリント学習<br>⑤7つチャレンジ（書き方・漢検・数検・英検・水泳・なわとび・パソコン）                 | ☆実力を伸ばす授業<br>①習熟度別小人数授業<br>②補習授業<br>③Oral Communication の充実<br>④オリジナル教材指導<br>⑤各種検定試験指導（漢検・数検・英検）                   |
|             | 幼児期は“確かな学力”の土台作りの時期でもある。子どもが主体的に取り組むさまざまな活動の中で、文字への興味や自然への関心を育てる。学習の基礎となる「好奇心」や   | ティーム・ティーチングとオリジナルプリントにより、一人ひとりの「自ら学び・考え・解決していく力」を養う。また、各種講習によっていっそうの学力向上のニーズにも応える。                                  | 生徒一人ひとりの熱意と成長速度に合わせ、着実に基礎を築いていけるよう、あらゆる方策を駆使している。教員も全員がオリジナル教材を作成するほか、英語では外国人講師                                    |

|            |  |   |   |
|------------|--|---|---|
|            | 「探究心」が育つよう環境を整え、実際の活動を通して「表現力」や「集中力」が身につく「達成感」が味わえるような遊びを工夫している。   | 7つの検定への「7つのチャレンジ」で学習成果を確かめる。  | と日本人教員が協力してリスニング教育に取り組んでいる。成長を測る検定利用も積極的である。  |
| ふれあい体験から学ぶ | ☆愛情あふれる遊び  | ☆秩序に出会う場所   | ☆生命(いのち)を謳歌する環境   |
|            | ①親子プレイデー<br>②異年齢保育<br>③リレー<br>④畑の水やり<br>⑤みどり祭  | ①宿泊体験学習<br>②たてわり活動<br>③スキー教室<br>④農作業の体験<br>⑤みどり祭  | ①宿泊体験学習<br>②充実したエンカウンター指導<br>③大運動会<br>④季節の収穫・調理体験<br>⑤みどりの時間  |
|            | 体育館での「親子プレイデー」。「異年齢保育」によるクラスを超えた体験。1年を通じて走り込む園庭での「リレー」。愛情をもって育てる「畑の水やり」。岩瀬キャンパス全体で取り組む秋の「みどり祭」。鎌倉女子大学の併設校である幼稚園は、その特性を生かし、さまざまな“ふれあい体験”を取り入れている。 | 自然とのふれあい。仲間とのふれあい。異学年とのふれあい。そして、労働とのふれあい。さまざまなふれあいを通して、より現実的なレベルでは社会性を身につける。そんなふれあいの中で、上級生から下級生への学園の精神と伝統が受け継がれていく。 | お互いを知り合うためのエンカウンター指導を充実させているため、より深くわかりあうきっかけとなる各種行事がとてもスムーズで、意義深いものとなっている。みどりの時間には、地球、日本、地域の自然や平和をテーマとした研究活動に取り組んでいる。 |

### 3. 幼稚園教育と小学校教育の連続性・一貫性

幼稚園教育における教育課程および指導方法に関する留意事項としては、小学校教育の内容や方法論を幼児期に適用するものではなく、それらの基盤となる「学力育成」や「主体的な生活態度」の基礎を培うことに主眼が置かれる。小学校教育との連関においては、道徳教育に関して幼稚園や小学校低学年における基本的なしつけや善悪の判断などの指導を徹底することがあげられ、学習過程としての体験活動を生かすことや生活経験を基盤とした保育内容・指導が継続されることが重要である。教育の方法および学習指導に関しても、「環境を通じた教育」、「遊びを通じた指導」といった基礎的な概念を生かし、幼児の生活経験に基礎を置き、主体的・自発的に環境と関わりとしての活動が学習となる。小学校教育との関連においても、「小学校以降の生活や学習の基盤の育成」を念頭に置き、幼児の生活を通して「創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う」ことが望まれる。

幼稚園・小学校それぞれの教育において位置づけられた教育の目的は、両者において子どもの生活を中心とし、生活がより高い次元へと向かうことを志向するものと考えられており、教育活動は子どもの生活から導き出されたものから出でて、また子どもの生活へと還元されることが目指すべきところとされるものである。このように両者の教育に対する考えは、それぞれが対象とする子どもの発達段階によって教育方法、あるいは教育的な関わり方の差異があるにしても、その違いが両者の教育や生活を異質にするものではない。

幼稚園教育においては子どもの生活の中に「自己表現」「自己充実感」の発揮による社会的存在としての人間形成がその目的に定位され、小学校教育においては学校教育と社会生活における「基礎」を形成することが目指すべきとして位置づけられる。両者の教育活動は、子どもが属する社会との関連なしに成立するものではなく、子どもの生活経験や発達の様相を媒介としながら連続した関わりと見ることができるのである。

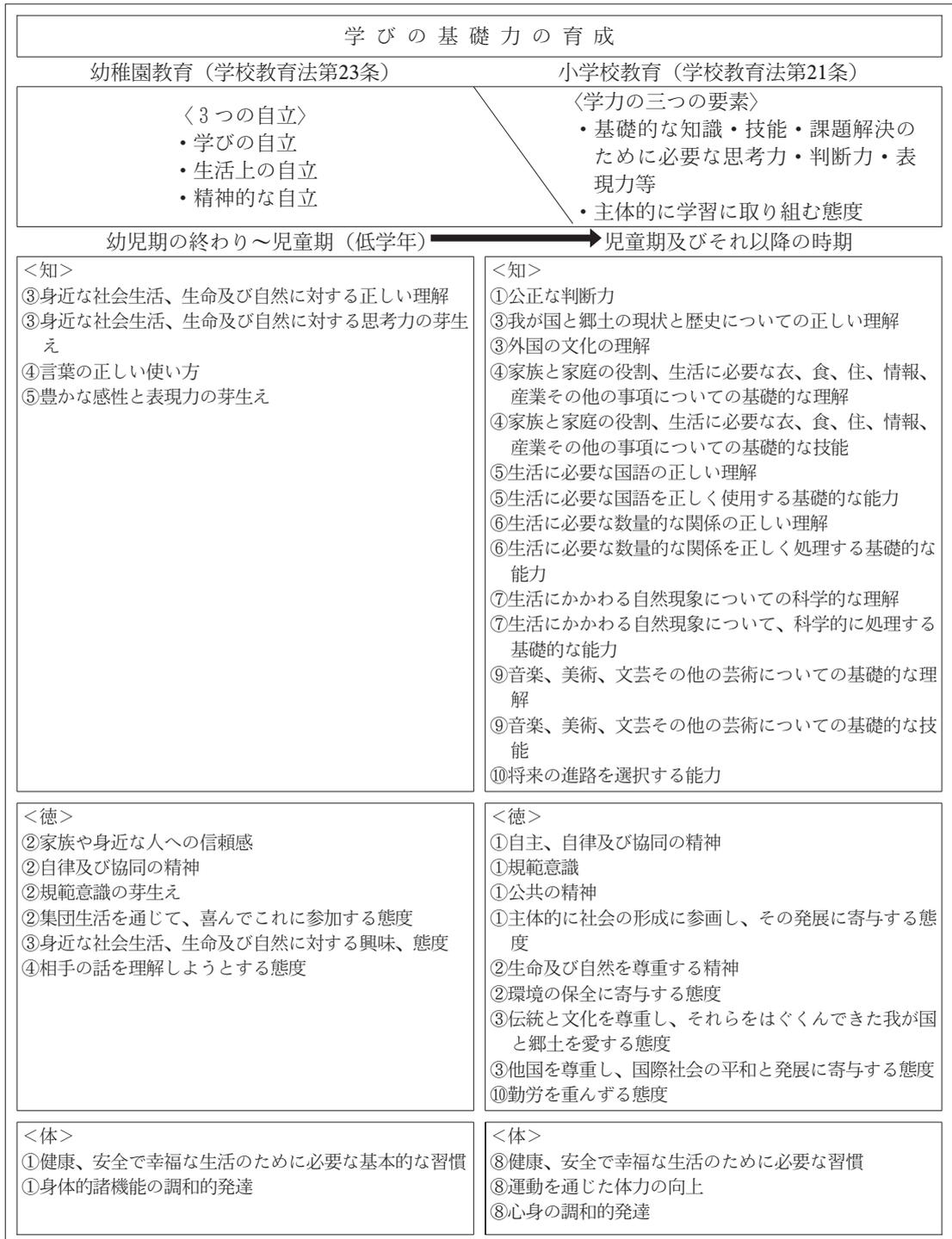


図1. 幼稚園・小学校教育の連続性・一貫性と学びの基礎力の育成

#### 4. 幼小連携・接続の必要性

幼稚園から小学校低学年にかけての時期は、身近な生活と結びついた活動そのものに関心を持ち、活動すること自体に自己表現としての意味がある時期である。活動を円滑に進める上で必要な知識や技術の習得は、それ自体としては意味をもたず、活動の結果もあまり意識はされない。しかし、子どもの年齢が6歳、7歳と上がるにつれ、結果を意識し、目標をもって活動することができるようになり、必要な知識や技術の習得に関心が向けられるようになっていく。そして、法則や技術の獲得に特に適した第2段階へ進み、その知識や技術を研究や問題に適用する第3段階へ進んで中等教育につながっていくのである。無論、学校の変化には「子どもの成長に生じる次のような変化を認識し、気づかれないようそれに対応しなければならない」<sup>2)</sup>教育的配慮が必要である。子どもの発達状況にあわせ、柔軟にきめ細かに対応していくためには、同じ発達段階にある子どもを同一の方針で教育すると同時に、次の段階の特徴が徐々に現れてくるのに応じてカリキュラムを編成できるよう、次の段階とも連続させておくことが必要となる。

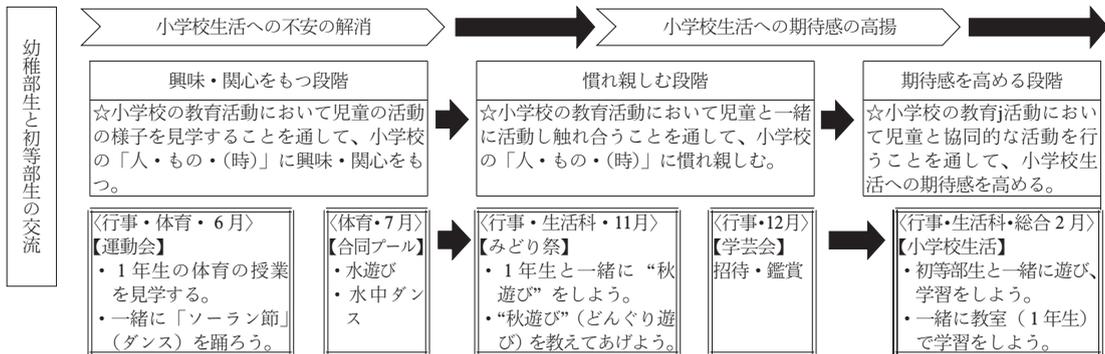


図2. 幼稚園生(年長・幼児)と初等部生との交流(アプローチカリキュラム・プログラム)

小学校低学年におけるスタートカリキュラムは、環境を通して行うことを基本とする幼児教育との方法的連続性をもつものであり、家庭・地域社会における生活と学習の場としての幼稚園・小学校における生活に連続性をもたせるものである。その中核にある生活科は、生活環境自体が学習内容となるとともに、「具体的な活動や体験」による学習の過程において「生活上必要な習慣や技能を身につけ」という点から、幼稚園・小学校の学習に教育課程上の連続性をもたせるものであると考えられる。

##### <初等部教員の声>

遊びや生活を通した総合的な遊びの中で、人やものや時(季節・時期)と豊かに関わり、いろいろなことを経験し学んでいる幼児の姿は、想像していた以上にレベルが高いものだった。育ちの連続性を意識した指導に努めることが、子どもの能力をさらに伸ばすことにつながると実感しながら、小学校教育に取り組んでいきたい。幼小の育ちのつながりが意識できるよう指導していきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 鎌倉女子大学「幼稚園、初等部、中等部・高等部 [3部長鼎談]」『フリージア』2009年リポート
- 2) ジョン・デューイ著 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社1998年 172.